

称号及び氏名	博士（人間科学）	酒井 隆史
学位授与の日付	2020年3月31日	
論文名	通天閣一新・日本資本主義発達史	
論文審査委員	主査	中村 治
	副査	住友 陽文
	副査	水野 真彦

論文要旨

本論文（酒井隆史『通天閣——新・日本資本主義発達史』）は、近代都市の歴史を、大阪市、とくにその一地域に焦点をあわせ、調査し考察を試みるものである。

方法について、基本的には、新聞史料、行政文書、雑誌などの史資料を可能なかぎりサーベイし、それをもとに史実に迫っていく歴史学的手法にくわえ、それらに支配と抵抗の痕跡を読み解いていく系譜学的方法をとった。さらには、文学作品、映画作品も資料として用い、そこに都市経験を読み解いていく記号学的手法も活用した。

以下、その概要を示す。

第一章「ジャンジャン町パサージュ論」では、盛り場としての新世界形成史を基本的に展開される。ここでは近代以降の新興盛り場である新世界の開設とその後の紆余曲折について、当時のさまざまな史資料を駆使して、その公式非公式のあらゆる側面から考察を試みている。

第二章「王将——阪田三吉と「ディープサウス」の誕生」では、戦前の大阪の棋士を代表する阪田三吉のその足跡をたどることで、近世の長町スラムが近代化のなかでいくどもクリアランスを受けながら解体し、さらに釜ヶ崎、飛田、新世界を中核とする「ミナミの南」である「ディープサウス」の地理を構成していく過程を追尾した。またこの時代、中世以来の将棋界の伝統が近代化される移行期にあって、阪田三吉の栄光と失墜の人生から、近代化する大阪の分裂とジレンマを浮き彫りにした。

第三章「わが町——上町台地ノスタルジア」では、大阪を代表する作家である織田作之

助と、かれの盟友であった映画監督の川島雄三の密接で複雑な関係性のなかから、ひとつの大阪像を描出した。東北出身の川島雄三は、そのキャリアの発端で織田作之助と親交をむすび、その作品をいくどか映画化し、さらに大阪を舞台にした作品もいくつか制作した。本章では、それらの作品を読み解くなかから、一般に考えられているはるか以上に、織田作之助の川島雄三への影響は強くかつニュアンスに富んでいたこと、それが織田作之助の大阪という都市像、あるいは織田作之助が大阪という都市にみいだしていたさまざまな世界観、価値観、人生観というものの、川島雄三なりの咀嚼と発展、批判的註釈の過程であったことを示した。そしてそのひとりの映画監督のなかの葛藤の過程を通して、天王寺を重心とする上町台地の一帯のあたらしい像を、論者なりに描き出そうとした。

第四章「無政府的新世界」では、いわば大阪を舞台にした「もうひとつの大正デモクラシー」史を試みた。とりわけ、大阪の戦前の民衆運動が最高潮に達していた、米騒動直後の、一九二一（大正一〇）年と一九二二（大正一一）年という二年に焦点をあわせ、新世界界限に拠点をおいて、八面六臂の活躍をみせていた、若い住民運動家や労働運動家の濃密なネットワークに注目してみた。なかでも、重点的に注目したのは借家人運動である。とくにこの時期は、都市流入の拡大とともに住宅問題をめぐる矛盾が噴出し、それにもなつて借家人運動が異様な高揚をみせている。それは近代的住民運動の走りでもあり、さらに活性をはじめていた労働運動、さらにはさまざまな社会主義の潮流の結節点でもあった。そのような借家人運動から、突飛な行動やユニークな発想、大胆な行動で、大阪をにぎわせた人びとの像を描きだし、さらには、それがなにを問題にしたのか、どのような解決を試みていたのかを通して、この時代の大阪都市周縁部のダイナミックな動きを分析した。

補論1「外骨の白眼」、補論2「蜂の巣、蜘蛛の巣、六道の辻——クリアランス小史、あるいは逃亡の地図」は、それぞれ小論ではあるが、本論全体のなかに伏流しているが重要とおもわれる論点を抽出してあらためて論じたものである。

補論1では、この時代の大阪のジャーナリズムにかんして、宮武外骨と吉弘白眼という当時の大阪の代表する二人のジャーナリストを俎上にあげ考察した。補論2では、近世以来の長町スラムの解体から、現在にいたる「ディープサウス」の地形の形成にいたるクリアランスの過程を、より詳細に描いてみた。この過程は、なだらかなものではなく、きわめてゆるやかに進行したものであるが、それは、さまざまな住民側の生活様式やなりわいの複雑さ、そしてしばしば多様なかたちで起きる抵抗のゆえである。この紆余曲折の過程から、一般的に長町スラムのクリアランスから釜ヶ崎の形成へ、と一直線に描かれる過程の力学を考察した。

第五章「飛田残月」では、新世界の形成の隠された核心部分に位置し、「ディープサウス」一帯の構成にも深くかかわっている、飛田遊廓に焦点をあてた。飛田遊廓の設置は、新世界発足の数年後であるが、遊廓の新設はないとされているコンセンサスのなかでの、その発表は大阪の町を震撼させ、大スキャンダルとなって、かなり長いあいだにわたって新聞ジャーナリズムをにぎわせた。飛田遊廓の形成が、新世界の経営陣とかかわっていることはこれまでそれほど正面切って論じられたことはないが、ここでは、新聞記事や雑誌記事などのさまざまな資料から、その密接な関係性——陰謀的な——のおよそ全貌をあきらかにした。またいくつかの映像資料（映画作品）から、戦後の飛田界限の地理と空間性を考察し、戦後の時代の変遷を素描してみた。

本論文は『現代思想』誌の連載をもとにしている。初出は以下ようになる。書き下ろし以外は、目次の下を参照のこと。

目次

序（書き下ろし）

第一章「ジャンジャン町パサージュ論」

第二章「王将——阪田三吉と「ディープサウス」の誕生」

第三章「わが町——上町台地ノスタルジア」

第四章「無政府的新世界」

補論（書き下ろし）

1, 外骨の白眼

2, 蜂の巣、蜘蛛の巣、六道の辻——クリアランス小史、あるいは逃亡の地図

第五章「飛田残月」

あとがき（書き下ろし）

初出

通天閣第一回 ジャンジャン町パサージュ論（1）新世界！ 新しい世界！、現代思想, 37 卷 16 号, 8-29 頁, 2007.12, 青土社

通天閣第二回 ジャンジャン町パサージュ論（2）抗争、新世界, 現代思想, 36 卷 1 号, 8-31 頁, 2008.1, 青土社

- 通天閣第三回 ジャンジャン町パサージュ論（3）水漏れする装置，現代思想 36 卷 2 号,16-37 頁, 2008.2,青土社
- 通天閣第四回 王将—阪田三吉と「ディープサウス」の誕生（1），現代思想 36 卷 4 号,16-31 頁, 2008.4, 青土社
- 通天閣第五回 王将—阪田三吉と「ディープサウス」の誕生（2），夕陽が丘の将棋指し，現代思想 36 卷 5 号, 26-50 頁, 2008.5, 青土社
- 通天閣第六回 王将———阪田三吉と「ディープサウス」の誕生（3）将棋の王様，現代思想, 36 卷 7 号, 26—48 頁, 2008.6, 青土社
- 通天閣第七回 わが町———上町台地ノスタルジア，現代思想 36 卷 8 号, 8-37 頁, 2008.7
- 通天閣第八回 無政府的新世界（1）借家人同盟、登場，現代思想, 36 卷 12 号、26-46 頁, 2008.9, 青土社
- 通天閣第九回 無政府的新世界（2）Trans Pacific Syndicalism/Trans Pacific “New World”（上）,現代思想, 36 卷 14 号, 2008.11, 26—42 頁、青土社
- 通天閣第一〇回 無政府的新世界（3）Trans Pacific Syndicalism/Trans Pacific “New World”（中），現代思想, 36 卷 15 号, 2008.12, 青土社
- 通天閣第十一回 無政府的新世界（4）Trans Pacific Syndicalism/Trans Pacific “New World”（下），現代思想, 37 卷 1 号, 14—37 頁,2009.1, 青土社
- 通天閣第十二回 無政府的新世界（5）借家人の精神からの＜社会的なもの＞の誕生（上），現代思想 37 卷 2 号, 20-36 頁, 2009.2, 青土社
- 通天閣十三回 無政府的新世界（6）借家人の精神からの＜社会的なもの＞の誕生（中），現代思想, 37 卷 3 号, 8-25 頁, 2009.3, 青土社
- 通天閣十四回 無政府的新世界（7）借家人の精神からの＜社会的なもの＞の誕生（下），現代思想, 37 卷 4 号, 48-70 頁, 2009.4, 青土社
- 通天閣一五回 飛田残月（1）湿った底に，現代思想 37 卷 10 号, 24-45 頁, 2009.8, 青土社
- 通天閣一六回 飛田残月（2）敷居の上の町（上），現代思想 37 卷 14 号, 64-76 頁, 2009.11, 青土社
- 通天閣一七回 飛田残月（2）敷居の上の町（下），現代思想 37 卷 15 号, 36-53,頁, 2009.12, 青土社

『通天閣一新・日本資本主義発達史』補論

序

本論文は、大阪の一部の地域—現在でいう大阪市の天王寺近辺（以後「大阪ディープサウス」と呼ぶ）にあたる—を取り上げ、発達期の資本主義社会のなかでの都市の変容を動的に描く試みである。

本論文は、スラム・クリアランス、開発などを介しての空間形成や衛生、警察の取り締まりによる民衆管理、そしてそれに対する、民衆の抵抗を通して、つまり、権力の戦略との関係で、ひとつの都市の動態を描くという点でミシェル・フーコーによる系譜学の絶大な影響力のもとにある。

第一章、第二章では中心的に俎上にあげているが、それにとどまらず本論文を貫通する、都市形成の結節点としての（日本橋）スラム・クリアランスの過程は、あきらかに、フーコーのいう「一望監視方式（パノプティコン）」の作用として記述できるし、本論文でもその視点を基本にすえている。すなわち、すべてを可視化し、すべてを登録し、ディシプリンという権力の行使様態をとおして、正常性へと規格化し、位階化するという、機能をはたす理念的装置である一望監視方式である。

しかし、本論文は、フーコーの権力理論の一般的な応用である以上のような視角はふまつつつも、べつの次元をより強調するものである。「一般的な応用」においては、あたかも権力が現実そのものを構成するというように、権力を万能の力をあたえるごとき記述を無数にうみだしてきた。あたかもそこでは、権力の対象となった人びとは、権力は能動的な作用を待つばかりの質料のように描かれるのである。本論文はそうではなく、権力はつねに事後的に作用すると考える。すなわち、すでにはげしく動いているもの、独自の地図や環境を形成している運動に、事後的に作用するのである。その衝突や捕獲のさいの衝撃は、確固として形成されたようにみえる構築物にも、いたるところに痕跡を残している。本論文の方法論は、このような衝突の痕跡を追尾することに一義的な目的がある。したがって、本論文の方法論は、歴史的・地理学的・社会学的手法を用いながら、ただたんに権力の作用ではなく、権力の作用とその限界の局面に極力視点をおいて分析するという、独特の系譜学的方法をとるものである。

たとえば、本論文をつらぬくひとつのキーワードである「逃亡」は、この方法と密接にかかわりあっている。抗議や異議申立て、蜂起やあるいは革命といった積極的な抵抗以前に、そして、その生地であるように、「逃亡」はすでに起きている。第二章で将棋指しやアウトロー（やくざ）たちの動向を追尾しながら論じたように、かれらがすでに幕末にはじまっていた巨大な離脱の運動の渦中であつた。その「逃亡」「離脱」のとめどもない動きにからみあうように、放浪の将棋指しややくざ者だけではなく、おかげまいたりやええじゃないかといった一時的な狂騒的で集団的離脱現象、旧来の慣行をも打ち破りながら激化していく一揆¹、

¹ 須田努『「悪党」の一九世紀』青木書店、二〇〇二年。

そうした流れに沿うように藩境を超え横議横行する士族たちの群れ、そして、そのような動きをあやつろうとする陰謀家たちのすがたがみえるのである。

これまで移動や移民の現象は、経済法則や政治の動向に左右されて生じるとみなされ、そこに内在する欲求や感情、自由への希求といった側面は二の次とされることが多かったようにおもわれる。とりわけ、資本主義こそがこうした移動や移民を動かす動因であるようにとらえられる傾向は根強かった。しかし、資本主義とは、こうした運動をむしろ封じる対抗運動ではなかっただろうか。本論文が注目するのは、このような資本主義とそれと密接にからまりあった権力が、このような運動を、あるものは抑圧し、あるものは塞ぎとめながら、独特の仕方回路づけていくそのやり方である。

以上に述べたような視点を基盤としながら、本論文は以下のような構成をとる。

第一章では、詩人小野十三郎の戦前から戦中にかけての動静をたどりながら、かれによって表現された大阪の姿を導入とした。かれの数多い「大阪」詩のなかで、新世界近辺を題材にした数少ない詩から、この地の独特の意味をあぶりだすことが目的である。この導入のあと、本章では、新世界と天王寺公園、飛田遊廓の並列する、大阪「ディープサウス」の独特の地勢をなす空間形成を、新世界史を中心にして描きだした。

第二章では、戦前の大阪の将棋界を代表する棋士・阪田三吉の足跡を追尾しながら、かれの棋士としての半生が、まさに日本橋スラムのクリアランスを通して「釜ヶ崎」が形成されるその過程と軌を一にしていることに注目し、阪田三吉と大阪というテーマを再考した。

第三章では、大阪を代表する作家、織田作之助と映画監督である川島雄三との友情をふまえたうえで、かれらが関係した文学作品、そしてとりわけ川島雄三による織田作之助や大阪に関係した映画作品を分析し、そこに残された織田作之助の痕跡から、織田作之助の大阪の意味、そしてかれの描こうとした大阪のありかたを分析した。

第四章では、米騒動から関東大震災にいたるまでのあいだ、日本の戦前の社会運動の黎明期でありかつ非常に多様な高揚をみせたその展開を、新世界とその界隈を拠点としたアナキストたちを中軸において描いてみた。

補論1では、本論文全体において重要な意味をもつ、宮武外骨と吉弘白眼という二人のジャーナリストを中心にすえて、戦前大阪のジャーナリズムの状況を考察した。

補論2では、「日本橋スラム」のクリアランスの解体の過程の一局面を、「日本橋スラム」の空間的複雑さと、そこを拠点とするアウトローたちの跳梁、住民たちのなりわいの実態、そして取り締まりの戦略などをとりあげながら描いてみた。

第五章では、飛田遊廓に焦点をあわせ、第一章でかんたんにふれた飛田遊廓の形成にまつわるさまざまな政治的・経済的過程をさらに掘り下げ、また遊廓形成以降の歴史を描きだし、その界隈の空間的様相を映像作品などを手がかりに論じてみた。

学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 酒井隆史

論文題目 通天閣——新・日本資本主義発達史

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間社会学専攻人間科学分野の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

1) 研究テーマが絞り込まれている。

近代大阪の天王寺・新世界・釜ヶ崎を取り上げ、発達期の資本主義社会から逸脱する民衆の姿に焦点をあて、都市の動態を、資本の利潤追求、民衆の生活様態、享楽、排除、選別といった視角から浮かび上がらせており、研究テーマが絞り込まれている。

2) 論文の方法論が明確である。

行政文書などの一次史料、新聞や雑誌などの二次史料だけでなく、映画などの映像資料を渉猟、分析、考察して天王寺・新世界・釜ヶ崎地域の動態を明らかにする歴史社会学的方法を用いている。

3) 先行研究が十分に踏まえられている。

近代の天王寺・新世界・釜ヶ崎を論じるにあたって踏まえるべき都市史・社会史・労働運動史・部落史・地理学・文学などの研究を網羅的に十分に踏まえている。

4) 結論に至る論理的展開が説得的である。

近世日本から続く「貧民窟」(スラム)である大阪市内の長町(名護町)とその周辺は、明治後期の第五回内国勧業博覧会をきっかけに大きく変貌し、大正中期にかけて新世界・釜ヶ崎・飛田として形成されていった。それらの地域が「大阪」というイメージ形成にいかにか寄与したかを、文学作品や映画作品などにも依拠しながら、歴史的・社会的・地理的に明らかにしている。そこに登場するのは、これまでの大阪の歴史をかざる有名人ではなく、資本主義の発達の陰で制度や規範から逸脱する投機家・極道者・企業家・車夫・博徒・アナキスト・私娼等といった、制度・法・秩序・共同体・道徳から放逐された人、また「法外の地」へ逃避していった人たちである。本論文はそういう人々に照射し、ミクロな視点にこだわることで見える都市景観の変容、資本主義の姿を明らかにしている。その論理的展開は十分な史実の明示を伴い、説得的である。

5) 研究内容に独創性があり新しい知見を提示している。

①本論文は、資本主義の発達の陰で制度や規範から逸脱する存在の動態に着目し、近

代大阪における都市史の隙間を埋めていこうとする意欲を持ち、その点で独創的である。

② 1920年代初頭に展開を見せた大阪市内の借家人運動が、新世界から都市部落にかけて活動していた方面委員や労働運動家らとのネットワークを作っている点を明らかにするとともに、他方で、世間的には悪評があった侠客や博徒との接点を彼らが持っていたことを明らかにしたことは新しい知見であり、従来の近代日本都市史研究が明らかにしてきた都市社会の実相をより豊かにしている。そしてその社会運動と社会政策や社会事業との連関をたどることにより、「社会的なもの」が社会に横溢していくさまを明らかにしていることも、本論文の独創的な点である。

③劇作家北條秀司の戯曲『王将』(1947年)に描かれている棋士阪田三吉の居場所と通天閣の布置関係がどのような虚構であるかを明らかにするとともに、通天閣が大阪を表象するものとして創作され、そして大阪市外出身の阪田が大阪を代表する人として描かれていく様子を、本論文は明らかにしている。

6) 当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められる。

本論文は、行政文書・新聞・雑誌・文芸作品・映像などの史資料を渉猟し、著者が「ディープサウス」と呼ぶ新世界・飛田・釜ヶ崎といった地域の変容とその意味づけを明らかにしたものである。そこでは、社会が上から与えられる規範によって秩序づけられていく様子ではなく、規範からはずれ、秩序を疑いつつも、天王寺・新世界・釜ヶ崎等都市社会底辺に居場所を見つけていった人々、何かに分類されたり一般化されたりするのを嫌う人々、「法外領域」にはみ出た人々の個性に焦点があてられている。天王寺・新世界・釜ヶ崎等を舞台にした文芸作品等の分析では、大正期までモダン大阪の象徴であった通天閣が、昭和期以降、拡張する大都市のなかに埋没し郷愁を誘うものとして存在していったことが、実際の大阪市内の地形(上町台地等とその西側にあたる窪みにおける「猥雑な地」との対照性)などにも配慮しながら、明らかにされている。これらの諸問題は従来の都市史や都市論が十分に把握しえなかったことであり、それらを明らかにしたことには学術的に大きな価値を認めることができる。

なお、本論文は2012年にサントリー学芸賞を受賞している。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は、本論文を博士(人間科学)の学位に価するものと、全員一致で判断した。